

Carson McCullers

— アメリカの孤独 —

江 口 裕 子

アメリカの都会を旅したことのある人は、週日といわず安息日といわず、街中の小公園や、広場や、さては両側を自動車が織るように通っている散歩路プロムナードのベンチにいたるまで、あまり裕福そうにも見えぬ男女が目白押しに並んで新聞をひろげたり、通行人を所在なさげに眺めている光景に必ずや出くわすことでしょう。このような人々には職業があるとは見えず、生活の方はある程度余裕もあってあくせく働くに及ばない人たちなのでしょう。また、アメリカのように大衆のための修養機関や娯楽設備の行き届いたところでは、こうした無為の人々が生活を気楽にたのしむことにはこと欠かないでしょう。にも拘らず、こうして一見日向ぼっこを悠々とたのしんでいるように見える人々の姿に、おようべくもない索漠とした孤独の影を感じとるのは私だけでしょうか？ 日が傾いて樹蔭が長くなる頃、これらの人々が帰ってゆく所は、おそらく細胞のように整然と区切られて、何処も同じ間取と設備をもったアパートメントと見なしてもいいようです。それは鍵一つで完全なprivacyの保てる個人の住居ながら、扉口から一步ふみ出せば天下の公道であります。彼らには植木をたのしむ庭もなければ、また団欒をたのしむ家族もないとすれば、彼らが日光と緑地と、そして何よりも活気のある人気を求めて、路傍のベンチに出てゆくのは人情の自然でありましょう。浮草のような生活をしている外国人に好んで近づき、意外なまでの友情を示すのもこのような独り住まいの人たちであります。アメリカの画一化された文明生活を象徴するようなアパートメントとその住人たちの孤独な姿の間には何か必然的な関係がひそんでいるように思われます。一見華やかで社会的に見えるアメリカの社会生活の背後には、孤独をおそれ、何物かに依存して個人的生活の孤立をのがれようとする人々の

群が存在することは否めない事実でありましょう。

McCullers の作品のなかで、Mick や Blount や啞の Singer 氏など、心の空しさに苛まれながら街を彷徨する人々に出あうとき、私は街中の街路樹の下に坐っている人たちのうつけた表情や、キャフェテリアで私に近づいて友好を求め、無償の親切をあたえてくれた老嬢や未亡人を思い出し、現実の彼らと McCullers の描く作中の人々との間には一脈相通ずる精神的状況のあることを見出さずにはおれません。それを私はアメリカの孤独と名づけたいのです。

前号で述べたように、McCullers は人々が孤独からのがれるために他者との間に心の結びつきを求めながら常に挫折する姿を、心のしこりのようによくくり返し表現しております。孤独は人間の本質的条件であり、人間の存在する限り消滅することのない問題でありましょうが、時代や環境によってこの孤独の現われ方、それに対する人々の態度には変遷があります。たとえば廿世紀以前のアメリカでは、Emerson や Thoreau に見られるように孤独はむしろ求められるべきものであり、俗塵をのがれて自然の中に孤独をたのしむアメリカ人は今よりは遙かに多かったように思われます。しかし現代ほど集団生活の中で人々の魂が孤独という状況に直面させられて不安を抱いている時代はなく、またアメリカという国ほどこの現代人に共通する精神的位相がもっとも深刻な度合で現われている所はないように思われるのです。そこで今 McCullers の中心的問題を現代のアメリカという時と所を結ぶ点に焦点を合わせることによって、彼女の描く孤独に何らかの現代的意義を見出すことが出来るであろうかということを考えて見たいのです。

彼女の作品の背景は主としてアメリカの南部社会であり、寧ろ限界のある環境であります。その中に描かれている庶民の生活は変化に富んでいてアメリカの生きた現実であり、作中人物もそれぞれの世代や階級や人種を代表する正真正銘のアメリカ人であって、彼女の文学世界はいわばアメリカ全体の縮図であります。その意味では彼女の表現する人間の孤独は必

ずしも南部社会の特殊な様相に由来するものと考えする必要はなく、むしろ私どもの視野は南部をも含めてアメリカ全土を一色に塗りつぶそうとしている近代的技術文明の支配下にあるアメリカの社会全般に向けられて然るべきでありましょう。

ただ、今 McCullers の生れ故郷であり、彼女の作家としての精神形成の土壌となった場所としての南部社会の特殊性にも触れておきたいと思えます。少くとも南北戦争以前の南部は英国における Scotland や Wales のように、アメリカの他の地方から独立した経済的産業的社会的事情をもち、独特な精神的伝統や生活習慣や、土地の人々の気質をもった地域でしたが、十九世紀後半から今世紀にかけては南部の工業化が急速に進展し、特に北部の産業資本の導入が増大するにつれて、工場、鉄道、舗装自動車道路等が完備し、また教育機関や商業的娯楽設備が増加し、都市集中の傾向が濃厚となって、南部は往時の農業的な伝統から脱却しようとする傾向を明らかにしめしております。しかし、日常生活や人間関係がより合理化し画一化していて、人々が同一の職業や貧富の階級別につながる傾向の著しい北部に比べると、まだしも南部は祖先伝来の土地への愛着もあって自然と人間との関係も密接であり、また人々の関係も家族や血族間の紐帯がつよく、同一血族圏に属する人々の職業、貧富の状態もさまざま、変化に富んでおります。のみならず南部社会には地主、白人小作人、山地人、ニグロなどそれぞれ異った伝統と慣習をもった生活様式が存在し、これらの階層間にはたえず対立と紛擾がくり返されています。南部には古来、大農園制度による半ば封建的な階級社会の圧迫のもとに解決を見ぬままに闇から闇へと葬られてきた犯罪、不正、暴力、不倫等の非合理的な事件が重畳している筈であり、世代を重ねるに従って、これらの未解決な問題から派生するさまざまな人間間の紛争は、個人の力では処理しがたい圧力となって南部人の生活に暗く罪ふかい陰影を投げていることでありましょう。今世紀に入ってから南部には社会的にも経済的にも政治的にも新旧の諸要素が複雑な絡み合いをもって対立し、「昔のよき時代」の南部人の生活を律してきた生活倫理も力を失い、工業化都市化の傾向に伴って大家族制の

伝統も崩れて個人の地位も不安定なものとなり、万事が混沌とした状態におかれております。このようにさまざまな異なる要素が対立と葛藤をくり返している南部の環境が、人々を創作にかり立てるような刺戟と劇的素材にみちた土壌となっていることは想像するにかたくありません。今世紀の初め頃から南部出身の作家や批評家の進出の目ざましいのもそのような南部の諸事情に負う所が多いのであります。

McCullers が少女期の最も強烈な想像的生活を送ったのは如上のような複雑な様相をもった廿世紀初頭の南部社会であります。John Aldridge は「感受性のつよい子供は南部においては、幼少の頃から大よその時を想像の中にこもってすごすか気狂いになるかというきびしい二者選一に直面するように思われる」¹ とさえいっておりますが、McCullers のように鋭い感受性をもった作家の少女期が上にのべたような tension のつよい環境に反応する度合がいたいたいまでに鋭角的なものであったろうことは、たとえば作者の分身と見られる Mick や Frankie という少女の孤独感や Baby という幼女の愛らしさに心迷ってライフル銃で彼女を傷つけた Mick の弟の Bubber, そして頭に負傷して髪の毛をそってしまわねばならなくなった当の Baby などという子供たちの frustration の痛切さを真に徹して描いている条りを読むことによってもほぼ納得されます。

「幼い子供の魂は繊弱な器官であります。残酷なこの世のふみ出しは魂を奇妙な形に歪めてしまいます。傷ついた子供の魂は萎縮して、その後永久に桃の種子のようにかたく穴が明いてしまうのです。あるいは又このような子供の魂はうみただれ、腫れ上って、最もありふれた事柄にさえもすぐ傷ついて疼くようになり、ついには肉体のなかにそれをになうことさへ苦痛となるものです。」² という McCullers 自身の述懐も、彼女のすごした少女期における環境との conflict から蒙った内的体験の深さ、鋭さをうかが

1 Aldridge, John, *In Search of Heresy*, New York, McGraw-Hill Book Co., 1956, p. 142.

2 McCullers, Carson, *The Ballad of the Sad Café*, Boston, Houghton Mifflin, 1951, p. 27.

わせるに足る言葉であります。McCullers はよく作品のなかで、鏡面にうつったり、レンズをとおして見た物の形を一再ならず描いていますが、その映像は必ず奇妙にひきつれたり、振れ歪んでいるのです。このことは McCullers の感受性のレンズについても当てはまることなのです。そのレンズは環境から蒙った傷手のために歪みを生じたものののように、それをとおして描かれる人生図や人間像は奇妙にデフォルメされた悲劇的な姿を帯びてくるのであります。

事実 McCullers の作中人物は不具畸形の者や、病人や、精神的変質者や、犯罪者など人生の表通りを濶歩することのはばかられる、どこかに歪みや欠陥をもった人物ばかりであります。Singer や Antonapoulos は啞であり、後者は薄馬鹿でもあります。カフェの主人 Biff Brannon は性的不能者であり、「悲しきカフェの譚歌」の Amelia 嬢はすがめの大女、Lymon は肺病やみのせむしであります。「金色の目の映像」の Penderton 大尉は路上で見かけた子猫を平然とポストの中に押しこむ変質者であり、夫の不義を知った Langton 少佐の夫人は庭木鋏で自分の乳首を切断するという精神錯乱の一步手前にある女性であります。「結婚式の一員」の Frankie は身の丈九尺の大女になりはせぬかと脅えており、黒人女 Berenice の片眼は義眼であります。これらの grotesque な外観や、また行為の残忍性や暴力は、孤独に苛まれたり、挫折し傷ついた人間の内的生活の象徴的表現であり、作者自身の精神的困難の symbolic extension と考えて差支えありません。

何故 McCullers はこのような悲劇的人物に托して人間の孤独と frustration をくり返し描かずにおれないのでしょうか？ McCullers の鋭い感受性のレンズにうつったアメリカの人々は、何故このようにデフォルメされた異様な人物となって登場するのでしょうか？ そして又人間の孤独や frustration が McCullers のみならず、現代のアメリカ作家の作品の主題として屢々描かれるのは何故でしょうか？

この孤独や frustration という現象は、現代のアメリカのように高度に

機械文明が発達して人間の生活を規制し、物質万能主義と商業主義の威力が支配的な社会で人間の精神が次第に行きつかずにおれない状況のように思われます。いいかえれば、この孤独や frustration は、個人を人間らしく生きづらくしている世の中、社会の機構そのものがメカニズム化して日常生活にも人間そのものにも画一化や非人間化をもたらし、個人の価値や要求を抹殺しにかかっているような社会と、それに対して創造的な人間の領域を守ろうとする個人との間の conflict と tension, そしてこの種の人間の社会からの離反あるいは抵抗、そういった普遍的なアメリカの体験に根ざしているように思われるのです。このような視点から McCullers の描く人々の系列を現代のアメリカ社会という背景の上においてみると、これらの人々と背景をなすアメリカ社会の間にはある避けがたい関連が浮び上るように思われ、何故彼らが一つの宿業のように孤独という烙印を押されて、歪められた表情で登場してくるのか、という疑問を解く鍵も見出されるように思われます。それでは、如上の説明のように人間の内部に tension や不安を深めつつあるアメリカの文明社会の様相とはどのようなものでありましょうか？

ニューヨークという都会について Sartre は次のような面白い批評を下しています。アメリカの文明を代表するこの大都会は平面的に見れば碁盤目のように整然と区劃されていて、世界一画一的な都会であります。しかし、そこに楯比する建築物は高さも様式も色調も千差万別であって、この点では明らかに個人主義の勝利を示しています。しかし、アメリカでは、この性質上相反する二つの傾向は互いに抵触するものではなく、個人主義は画一主義を基盤としており、画一主義の中で高さか深さにおいて新しい方向を示しているのだ、と Sartre はいうのであります。このニューヨークの街に象徴されている個人主義と画一主義とは、事実現在のアメリカ社会を特徴づけている二大要素といえるでしょうが、私にはこの二つの傾向はいずれも現代の、特に大都会の集団生活を営む人間の孤立感を助長する原因のように思われます。

先づ、個人主義の影響について考えてみると、これは近代の個人の孤立

化をもたらした最も有力な原因であります。階級制度の社会では、個人の地位は組織のなかで上下の関係において承認され、且つ保護されてもいたために、孤立の意識は今ほどには強く感じられなかったと見ても差支えありません。個人主義は、個人を階級組織のわくから解放した代りに、個人の地位は上下の関係を失って無限の平面上におかれることとなり、極めて拠所のないものとなりました。従って個人主義の徹底した所では、職業的生活以外に他人との個人的関係を保ち、社会的な自己の立場を認められるためには、各種の協会、クラブ、連盟の如き任意的な共同団体に属することによって、横のつながりを求める外はありません。そうしない限り、個人は社会的に自己を拡張したり、個人の価値や能力を認められることは困難であり、自己を孤立した存在と感じざるを得なくなります。これによれば、各個人が幾つかの団体に属して活動する度合は、経済力や時間的余裕や、あるいは教養の視野の広さによって異なるわけで、より多くの協会やクラブに属しうる人々は、属しえない人々に比べれば、より孤立状態から免かれているということも出来るでしょう。

次に、人間の孤立の意識を強めるものは機械文明そのものであります。現代のように機械があらゆる生活様式の中に侵入してきている世の中では、人間は機械的な集団組織の一部として、流れ作業的な生活の軌道に従って行動せざるを得なくなります。人々はとかく機械を相手にして過ごす度合が大きくなり、自分も人間たることを無視して機械の如く行動することを余儀なくされてゆきます。ビジネス生活に見られるように人間同志の関係も次第に機械化して、精神や感情の交流する度合が少くなり、最少限のエネルギーで最大限の利益効果をあげられるような、いわば必要をみたすための合理的ビジネスに近づく傾向となります。このような社会のメカニズムの中で、人間は自分を単なる物質であり、機械の中の一分子のごとく感じはじめ、一方では人格体としての自己の空虚さ、人間の喪失感を抱かずにはおれなくなります。機械文明のなかの人間の孤独感はそのような所から生まれてきます。たとえば、録音器を相手にするタイピストや速記者は例外なしに人間の口から直接肉声を聞くことを望むということであ

ります。また駅の改札口で切符売りの代りをする自動改札器の前を通るにせよ、一杯のコーヒーを前に幾時間もねばって、ウェイトレスの顔を眺めてうさを晴らすことも出来た数十年前に比べれば、機械ががらがら音を立ててコココーラや煙草を差し出してくれるのでは味気なさこの上もなしであります。機械の顔ばかり見ていれば自分がどんな個性であるかなどということは問題外となり、自分も人間らしく感じられなくなるのです。一日中機械を操作してくらす工場労働者は人間を相手にせぬ習慣から孤独感に陥るといい、これを緩和するためにたえず工場内では、拡声器を通して音楽を流しているということであります。このように自動機械の普及は日常生活に限りなく便宜さと快適さとをあたえてくれる代りに、人間同志の関係を疎遠にし、愛情とか理解とか同情というような同化的な感情をさえ稀薄にしてゆく傾向を作り出します。この人間性喪失や人間関係の疎隔の自覚は現代の人々の心に孤独と寂寥とをひろげてゆくのであります。

また、機械はその性質上、物の規格生産及び大量生産を行い、市場には標準型の製品があふれております。これらの製品は日常生活の隅々にまで入りこんで衣食住の様式を画一化するばかりか、ラジオやテレビ、映画、新聞や大衆雑誌の如きマス・コミュニケーションの普及は人間の物の考え方や態度、行動、趣味にいたるまで画一化してゆきます。アメリカの町からは次第に地方色が減退して、人々は同じような標準化した町の中の標準型住宅に住み、大量生産された標準型の既製服を着、標準型自動車をのりまわし、全国の何処のマーケットでも買える同じ罐詰の同じ味のする食物を食べています。大衆的キャフェテリアの食物の味は最も標準的なものであります。赤ん坊は標準型の産院で生まれ、名札をつけて他の子供と区別され、同じ規格品の牛乳をのんで育ちます。やや長じては標準型の学校に入学して標準型の教科書を使って勉強し、誰もが一樣にテレビのスーパーマンや西部男に血を湧かせるわけであります。碁盤目のように区切られたニューヨークの通りは、各々があまりに紛らわしいために個別的な名で呼ぶより、番号で区別した方が楽であります。かってアメリカを訪問したコクトオが「精神の歯は噛むのを止めるだろう」と警告を發したように、機

械は万人にあうような規格製品を大量に送り出し、即席の使用に間に合うようにしてくれますから、人々は自分自身の技術をつかって物をつくり出したり、個人の創意によって物を考えたりする必要は減じてゆきます。即ち人々は標準型の生活に従うことが最も簡便でもあり、かつ能率と快適さを約束されますが、その代り他の誰とも同じような生活様式の中に暮し、他人と同じような物の考え方、行動の仕方を植えつけられることとなります。個人の生活で個人色を出し得るのは収入源の多少のみが之を決定するわけで、ニューヨークの建物が画一的道路面に立って、その階層や色調で個人主義を表現しているのと同じ理窟であります。しかし、根底にある画一主義が人間から創意や想像力を減退させてすべての人をひとしなみにしてゆくのが大勢であり、このことがやはり人間の内に喪失感をもたらすことには変わりはありません。現代のように目まぐるしいスピードで回転し、生存競争の激しい文明社会では、人々に精神的不安や frustration をもたらす原因は他にも多くある筈ですが、人間が人間らしくなくなるという致命的な喪失感や、呼べども反響のない人間間の孤立の意識は、機械時代に生きる人間の内部に前時代の人々の知らなかったような救いがたい孤独感をひろげてゆくことは否めない現実でありましょう。アメリカでは、人々の frustration や、葛籐や、性格異常などに孤独感の果している役割が極めて大きいということも見のがせない事実であります。

以上のような特徴をもったアメリカの社会では、機械化、画一化の趨勢に順応して他の誰とも同じような人間になり、他人の意見にはたえず注意を払って誰からも気に入られるような人間になることを望み、また物質的便宜さや快適さに無批判に満足している多数の標準型人間が存在する一方、このようなメカニズムに抵抗を感じ、自分を異質分子として孤立感を味わう個性型の人間が存在する筈であります。というより殆どすべての人はこの型を両方とも自分のなかにさまざまな度合で持っているのであります。社会学者の David Riesman は如上のような順応型の人間がアメリカの大都会の青年層や高級サラリーマン層に多いことを指摘して、この型が将来支配的な様式になるであろうと予告し、これを他人志向型 other-

directed type と名づけております。¹ このような機械的画一主義の支配する社会で、すべての人はある程度これに従って生活せざるを得ないわけですが、これに無批判に順応出来ない個性や個人的信条のはっきりした人々、Riesman の所謂 inner-directed type に属する人々は、社会と自分との間にある違和感のために、孤独や frustration を味わわねばならぬ結果となります。特に創造的仕事にたづさわる芸術家や思想家は、いつの時代にも孤独に運命づけられているにせよ、このような社会は彼らには一つの危機として受けとられることでしょう。それはいうまでもなく、社会の要求する合理性、規格性、能率、スピード、ビジネス主義等すべてが彼らの身上である独創性や想像力とは抵触するものだからです。創造的であるためには、他から制約をうけぬ自由な精神活動の領域と自由な時間とを確保する必要があり、また彼らは、作品をとおして芸術家の vision を share し、正当にこれを評価してくれる読者層を必要とするのですが、マス・コミを武器とする商業主義は宣伝広告によって時には彼らをマス・コミの王者に引き上げ、時には抹消し、いわば彼らの社会的生命の活殺権を握ることによって芸術家の世界に干渉し、また作品そのものの真価を歪曲して芸術家と大衆との間の本質的な communication を不可能なものにしてしまうのであります。このこと自体も作家を孤立の立場におくこととなりますが、才能を守ろうとする良心的な芸術家は自ら大衆社会から逃避するか反逆するか、いずれにせよ社会のなかでの孤独者、疎外者、変り種としての自分を見出さずにはおれないこととなるのです。

以上のような機械文明の社会と人間との関係については、既にいい古された感はありますが、ここで問題としている McCullers の孤独への切実な関心も、アメリカのような文明社会における人間——特に個性型人間の内的困難に根ざしているのだということを以上のような一般的な課題への考察から引き出したかったのであります。

Donald Richie 氏が「McCullers 夫人の描く社会が頑固な画一性に締め

¹ Riesman, David, *The Lonely Crowd*, New York, Doubleday Anchor Books, 1955, p. 36.

上げられており、これに反抗しうるのは少年や老人や精神的な不具者のみだという点でもアメリカそのものにつながっている。彼女の全作品は非常に個性的な世界となっているが、同時にそれは実存するアメリカ社会のかなり精巧な複製にもなっているのである。¹とのべているように、McCullersの描く子供や浮浪者や不具畸形の人や変質者などは、Riesmanの所謂他人志向型には属さない人たちであり——あるいはその象徴であり、画一的な社会から己れを閉め出している outsider であり、世の中での異端者であり、かたわ者であり、people behind footlights² であります。そして子供は子供なりに、変人は変人なりに本質的に標準型人間となることを拒み、頑強に個性を主張しているのであります。「結婚式の一員」の Frankie はかつて見世物興行で見た畸形児たちの目が彼女に「おれたちはお前を知っているぞ」と話しかけるのを感じ、また刑務所の窓ごしにのぞく囚人の眼が同じことを語っているのを感じます。孤独に脅える Frankie が仲間の意識を抱くのは、このように閉された世界にいる罪人やかたわ者でしかないのです。Mick のような子供は、大作曲家になるか大発明家になりたいと「蛾の天上の星にあこがれる」たぐいの大望を抱いており、浮浪者の Blount は社会改造の夢を、Copeland 医師は同胞のニグロ人種の改善と、人種的偏見の現状打破に使命感を抱いていて、いづれも内なる理想や vision に忠実な人間であるために、彼らの住む固定化し標準化した環境との違和感に悩まねばならないのです。ただし、Mick の場合は、家計を助けるためにウールワースの売子となって、「敏活さと微笑を保ちましょう」という店の標語に従って、一日中顔をほころばせていなければならぬ職業生活がはじまると、彼女もまた急速に画一社会の大人になり変ってゆきます。そして、かつて彼女の奔放な想像や愛の成長した「内の部屋」は内側から錠が下りて彼女から遠ざかってしまうのであります。

McCullers のこのような個性的な子供たちの中で一つの例外は「心は孤

1 Richie, Donald, 「現代アメリカ文学主潮」、英宝社、昭和三十一年、九九頁。

2 McCullers, “Reflections in a Golden Eye”, *The Ballad of the Sad Café*, Boston, Houghton Mifflin, 1951, p. 529.

「独な獵人」の Baby という幼児であります。野心家の母親は Baby を映画女優として売り出すためにさまざまな芸を仕込みます。彼女はいつも夜会に出るような服装をして路上に出て来ては、ほかの子供たちの前でバレエをしたりとんぼ返りをして見せます。彼女はいつも人に見られることを意識して、スターのように気どったポーズをして歩き、映画の中でいい役をしている子役を見るとあとで御飯を食べさせるのに骨が折れるほど興奮してしまいます。彼女は女優の意識そのものであり、日常のそぶりの一つ一つが演技でありショウであります。Baby は売名と成功とをあてこんだ母親が彼女の個性を歪め、女優という鑄型にはめこんで一種の自動人形か、あるいは一個の標準型商品として育て上げた「おそるべき子供」の戯画でもあります。彼女は、他の子供や芸術家など *people behind footlights* の属する世界に背を向けて、俗世間の *footlight* を浴びるために育てられた子供であります。しかし、この子供が一つの型から個性へと、彼女自身へと轉身するかに思われる時があります。あるとき Baby は子供仲間の誘いかけに応じず、つんと顔をそらして前を通りすぎ、Mick の弟の Bubber にライフル銃で射たれてしまいます。そして頭に負傷して髪の毛をそられてしまい、踊りの舞台にも立てなくなってしまいます。この心身の挫折を機として彼女ははじめて个性的人間としての素顔を現わすのです。彼女は負傷して以来自分をひどく恥じ、むくれてばかりいて大人たちを手こずらせます。伯父の Biff Brannon の前で日曜学校で覚えた聖句を暗誦してごらんといわれても仲々口をきかず、最後に「エス泣き給う」「Jesus weeps.」と一言だけ吐き出すようにいいます。この一言は完璧であり、寸鉄人をえぐる言葉であります。これは、挫折感を体験した子供の魂から吐き出された無限の軽蔑と反抗と悲しみの凝結であり、言葉をこえた真実であります。歪められた幼児の個性は、挫折の原因も理解しえぬままに大人たちの世界に向って、このような形でせい一杯の反抗を投げつけているのであります。

ともあれ、McCullers の作品の中で、自分をかたわ者と感じたり、よそ者の意識をもつ孤独な人々は実はもっとも人間らしい人間であって、正常

な自己表現の衝動をもち、愛情や理解による人間同志の本質的な交流を渴望しながら、その道を阻まれている人々であります。そして、啞や片眼やすが目などの不具畸形は、外部の世界から絶縁されて正常な交流を欠いている人間の孤独の象徴に外なりません。夫の不貞に打ちのめされた少佐夫人 Alison の唯一の慰め手であるフィリッピン少年の Anacleto が “... the Lord has (had) blundered grossly in the making of everyone except himself and Madam Alison—the sole exception to this are (were) people behind footlights, midgets, great artists, and such-like fabulous folk,”¹ というとき、作者は彼に托して人間の真の価値を転倒させるごとき現実社会へ痛烈な皮肉を浴びせているのであります。

これらの人々が孤立状態をのがれて他者の中に自分を反映させ、人格的な共同体となりたいという願いは「結婚式の一員」の Frankie に最も明瞭に現われています。前号でのべたように、彼女は兄と花嫁を自分の属すべき共同体、即ち自分の we であると考え、結婚式のメンバーとなることによって孤独をのがれようとするのですが、彼女が世界中のどんなクラブにも属していない人間だという自覚から生ずる孤独への恐怖、そして何らかの共同体のメンバーになりたいという願望は、アメリカ人一般の中に顕著な associative impulse と照応するものではないでしょうか？ そして、この衝動の根底には、アメリカの人々の中に潜在している孤独への怖れが暗示されているように思われるのです。事実、世界中でアメリカほど諸種のクラブ、協会、組合、連盟の如き共同団体の多い国はなく、一九五〇年半ばの統計では友愛組合は二千万人の会員を持ち、婦人クラブは十万に及び、農村や小都市にある 4-H クラブに属する青年の数は二百万に達すると言われ、その他文化、政治、宗教、実業、社交等のクラブや協会は無数に存在しております。このような現状からでもアメリカ人ほど Frankie のいう we に属したいという渴望のつよい国民はないということが知られるのであります。これは先にも述べたように、個人主義の生活や機械的集団社会

1 McCullers, “Reflections in a Golden Eye,” *op. cit.*, p. 529.

の中で孤立化した個人が、何らかの社会的団体に加わり、同じ心と目的をもった人々と人間的交流を持つことによって、個人としての自分の存在や地位や能力を確認したいという要求から生じてきた現象でありましょう。このような自発的な共同団体においては、職業的生活では求められぬより緊密な個人的関係や、共通の個人的体験をもつことが可能であり、人々は機械的集団の一分子たることを免かれて、一個の人間として他のメンバーと共に働き共に語らうことによって互いの個性を認め合い、この共同体の中で自分の社会的地位を明らかにし、個人としての自己を実現させることも出来るのであります。このような手段によって大多数の人々は、利潤追求を目的としない公共福祉の事業のために自分も一役買っているのだという社会的な連帯意識を得るとともに、さもなくば直面しなくてはならぬ孤独感から免かれているのだとも言えるのであります。

「心は孤独な獵人」の中で Copeland 医師が一夜 Blount と激論をたたかわせながら真実こめて忠告する言葉は「孤立しないようにしなさい」ということであります。白人の社会からたえず圧迫をうけているニグロの人種的な団結力は格別なものと言われますが、この作品の中でも、孤立しているさびしい白人の一人一人に比べると、大家族制度の姿を保っている Portia たち黒人家族の団欒は極めて対照的に描かれています。そして、彼らの結合の固さを代弁するように Portia のお祖父さんは「おら、身内の者が血縁も縁組したものもみんなより集まるのはええことだと思うとるだ。みんなと一緒に苦労して助け合うことじゃ。すりゃ来世でいつかはええ報いがあるだ。」というのです。またクリスマスの朝 Copeland 医師の家につめかけた黒人の群衆が、ニグロの苦難の歴史を語り民族の自覚を鼓舞する医師の熱弁に耳をかたむけ、之に呼応する ritualistic な厳肅さと悲壮さにみちた場面は作中の圧巻でありましょう。また McCullers は黒人女の Berenice をとおして、不当な outsider の立場に立たされてきたニグロ人種の人間的要求を McCullers らしい手法で表現しております。Berenice の片眼は青い硝子の義眼で、今一方の生きた眼は灰色をしています。こうした embarrassing なデフォルマションの中には常に悲しい真実が潜んで

いるのです。この青い義眼は一体何を意味するのでしょうか？ それは、何世紀もの間虐げられ、白人の社会から疎外されてきたニグロ人種の白人に対する人間的な communication の願い、白人の社会に参加し、彼らと shared experience をもちたいというニグロ人種の悲願を象徴しているのではないのでしょうか？ 事実 Berenice の心に描く理想の世界は、孤立した劣等感に悩む有色人種がなくなり、全人類が青い眼と黒い頭髪と淡褐色の皮膚をもった人種となり、地球上に愛と平和がみちみちることなのでありますから。

芸術家であり、彼女自身おそらくアメリカの大衆社会に順応しえない outsider である McCullers は、以上のようなデフォルメされた人々を次から次へと登場させることによって、アメリカの現実社会の内部にひそむ人間の魂をいびつにし、孤独に迫りやる病根を暗示し、その文明の跛行性を諷刺すると同時に、正常な個人的交流や人間らしい愛情への願いを彼らに托して表現しているように思われます。従って彼女のえがく異形の人々の群像は McCullers 自身の内的困難のみならず、より普遍的なアメリカの孤独と frustration の象徴的表現であるということも出来るのであります。

最後に、アメリカ作家の孤立について一言するならば、孤独という主題が McCullers のみならず、多くの現代のアメリカ作家の主題として現われるのは、やはり個性型人間としての芸術家のアメリカ現代社会における孤立感に由来するものでしょうが、この作家の孤立はさらにアメリカ文学の歴史をさかのぼってみても主要な一潮流といい得るほどに多くの作家の中に見出されるのであります。それは精神や知性の故郷をヨーロッパに持ちながら機械文明と物質主義の国として発展の一路をたどったアメリカにおける芸術家の宿命ともいべき現象でありましょう。Irving は英国の伝統や文化に魅了されて非アメリカ的作家となり、Poe は流浪の一生を送って幻想の世界に逃避し、Hawthorne は孤立を罪と見なしながら自己の内に沈潜して自虐的な人間省察の道をえらび、Mark Twain は晩年ペシ

ミズムに陥って、人間を機械的決定論の前に投げ出し知性の創造を否定するにいたり、James や Eliot は自国に安住し得ず旧大陸に精神的故郷を求めてアメリカの国籍を捨て、Lost Generation の作家は、知的精神的にアメリカの土壌から根こそぎにされた若い intellectual の群であり、いづれも本国の社会からの孤立と乖離を共通の特色としております。今後といえどもアメリカの芸術家たちの「強制された鑄型の中で苦悩する創造力の悲劇」はくり返されることであらう。

Spender はアメリカほど作家の孤立現象の著しい国はなく、作家たるものは成功するにつけ失敗するにつけ、大衆社会から孤立して芸術家としての才能を守るか、又は脱落して孤独なシニシズムに陥るより外ないことを指摘しておりますし、¹ 詩人の MacLeish も、国際的名声のある芸術家もアメリカでは国内的流謫 domestic exile の状態で生活せざるを得ない現状をなげいておりますが、² アメリカの芸術家の危惧は商業主義のマス・コミによる sensational な宣伝や広告に利用されて芸術家的良心を見失うことであらう。今日のように出版業者の目ざす本の大量生産は作品の価値を商品化し、読んでは捨てる鼻紙程度の値打ちに引き下げかねませんし、また文芸作品や作曲や劇の脚本などが業者や演出家によって大衆に appeal するように改作されることはあたり前のことになっているようであります。McCullers 自身にしても、「結婚式の一員」の上演に際して劇場関係から作品の vision をこわすような注文をつけられて、観客との純粋な vision shared が行われなことをなげいているのであります。³ このように商業主義は作家の才能への無関心や、創造性の無視という傾向を助長しており、真に良心的な作家の大衆社会からの孤立又は逃避はさげがたい現象であります。現今のアメリカ作家の大学に所属する傾向が著しいのも、彼らが経済的に大学に依存することによって、マス・コミの悪影響を

1 Spender, Stephen, "Situation of the American Writers", *The Making of a Poem*, London, Hamish Hamilton, 1955.

2 MacLeish, Archibald, "The Isolation of the American Artist", *The Atlantic*, January, 1958, pp. 55-59.

3 McCullers, "The Vision Shared", *Theatre Arts*, April, 1950, pp. 28-30.

さけるためでありましょう。彼らはこのような手段をとるか、海外にのがれるか、辺鄙な土地に隠棲するかしてマス・コミから才能を守るか、でなければ大衆社会の要求に迎合して商品文学の製造者となる道を選ぶほかはないように思われます。

McCullers の作品の中にくり返される孤独の主題も、アメリカ社会の成り立ちや現状、そして如上のようなアメリカ作家の宿命的な立場を考え合わせる時、これらの現実の事情との間に必然的な因果関係が示されるように思われます。「アメリカ作家の孤独は、それが極めて深いアメリカの体験に照応するが故に意味ふかいのである」¹ という Spender の言葉は McCullers の場合にも正しく当てはまる言葉であります。

1 Spender, *op. cit.*, p. 189.

書 目

McCullers, Carson, *The Ballad of the Sad Café*, Boston, Houghton Mifflin Co., 1951.
McCullers, Carson, "The Vision Shared", *Theatre Arts*, April, 1950.

Aldridge, John, *In Search of Heresy*, New York, McGraw-Hill Book Co., 1956.

Lerner, Max, *America as a Civilization*, London, Johnathan Cape, 1958.

MacLeish, Archibald, "The Isolation of the American Artist", *The Atlantic*, Jan., 1958.

Richie, Donald, *The Trends of Contemporary American Literature*, translated by Shozo Kashima, Tokyo, Eihosha, 1956.

Riesman, David, *The Lonely Crowd*, New York, Doubleday & Co., 1955.

Sartre, Jean-Paul, *L'Amérique*, translated by Kazuo Watanabe & Others, Kyoto, Jimbun-shoin, 1953.

Siegfried, André, *Aspects du XXe Siècle*, translated by Toshio Sugi, Tokyo, Kinokuniya Shoten, 1956.

Spender, Stephen, *The Making of a Poem*, London, Hamish Hamilton, 1955.

Résumé

Carson McCullers: Human Isolation in America

Yuko Eguchi

No other civilized, modern people seem to me to be so much confronted with the reality of human isolation, and to suffer so much from their emotional void as present-day Americans. One might say that Mrs. McCullers' obsessive preoccupation with individual loneliness is rooted in this general American experience.

One of the factors which has caused human isolation in America seems to lie in the highly mechanical and materialistic civilization. People have become more and more aware that they themselves are acting as a minor part of a machine process, and as something other than personalities. They suffer from a sense of loss of essential communication between man and man because of the impersonalization of human relations. In a mass society like the American, people's way of life has become increasingly standardized, and under the wide influence of mass media, even their thought, feeling and taste tend to be standardized. Thus, mass culture deprives a man of the means of freely choosing what he really likes, and expressing what he really is, and diminishes the power of distinguishing himself among others by personal colorings. In short, what mass society requires of him is to live, dress, act and think like everyone else. These general tendencies of dehumanization and impersonalization are certain to have generated in modern men a new loneliness and emotional void unknown to people who lived before the machine age.

Individualism might be another factor that has caused American loneliness. While it has emancipated an individual from the bonds of hierarchical society, it has also served to cut him off from any permanent human tie. In a nonhierarchical society like the American, man feels himself unknown and unprotected, unless he holds membership in clubs, societies, or some other voluntary associations. There he can form more personal relationships with others than in his half-mechanized job life, by working, talking and eating with others, and there he can make his way as a person, not as a part of a mechanical organization. It may be a way for the American to escape from his individual loneliness.

Mrs. McCullers, with her keen perception, looks through the frustrated and distorted inner lives of people under the dehumanizing influence of modern civilization, and reveals their inner difficulty through symbols of the physically deformed and the hurt. It seems to me that lonely people in Mrs. McCullers' world, whose search for the means of self-expression and communication invariably ends in failure, are the symbolic extensions of the dilemma of creative personality in this standardized mass society.